

海外出版月間イベントを開催しました。

京都大学 学術研究支援室 人社系グループ

京都大学学術研究支援室（KURA）は、6月を海外出版月間として、研究成果を海外へ発信する研究者を応援する一連のイベントを開催しました。まず、海外から人社系学術出版社の編集者を招き、「編集者と語る海外書籍出版セミナー」を3回にわたり開催。第1回は、日本を含むアジア研究、歴史研究に強い Brill 社から Uri Tadmor, Publishing Director。第2回は、人文・社会科学とりわけ言語学に定評のある De Gruyter 社から Lydia White, Acquisitions Editor。そして第3回は、Springer Nature 社から、Palgrave-Macmillan ブランド Jacob Dreyer, Senior Editor と Springer ブランド Juno Kawakami, Editor の計4名の編集者を招きました。各回のセミナーでは、各社の伝統や強みの紹介、書籍出版を考える著者への具体的なアドバイスがありました。（4名の編集者は、本学の研究者に向けてビデオメッセージを残していますので、こちらもご参照ください。）各回セミナーに引き続き行われた質疑応答では、海外での書籍出版を視野に入れている研究者から具体的な質問が次々に寄せられました＜当日の Q&A の内容 : https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/_files/_ck/files/QA_final.pdf>。さらに、第2回の De Gruyter 社のセミナーには、実際に出版を経験した高山佳奈子法学研究科教授が登壇し、ご自身がドイツの研究者と共催した法学シンポジウムの成果を編著としてまとめられた経験を参加者に共有していただき、参加者の理解もより一層深まりました＜高山教授の発表資料 : https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/_files/_ck/files/20190610_de_Gruyter_Takayama.pdf>。各セミナーにはそれぞれ、12名（研究者10名）、11名（研究者7名）、13名（研究者10名）が、個別相談には、のべ24名（各回6名、7名、11名）が参加しました。

また、6月19日には、海外出版月間を記念する特別セミナーとして、「オープンな研究成果出版－研究評価への総合的アプローチに向けて」を開催し、17名が参加しました（本学研究者2名、他大学5名、学内他部署5名、KURA5名）。講師は、欧州委員会オープンサイエンス政策プラットフォームの専門家委員であり、オープンサイエンスを実現するプラットフォームを提供する Rebecca Lawrence F1000 代表取締役。講演では、欧州の学術出版とそれに連動してきた研究評価について、最先端の状況を報告したほか、研究者によるピアレビューの過程を公開し、可視化する F1000 の試みを紹介。目まぐるしく変化する学術出版の最前線の状況が垣間見られました＜当日の講演スライド :

https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/_files/_ck/files/Kyoto_slides_19-06-19_v2_compressed_jp.pdf>。講義に続き、F1000 ファカルティとして、2013年から優れた論文を同名のウェブサイト :

<https://f1000.com/prime/thefaculty/all?institution=kyoto%20university> で紹介している高橋淑子理学研究科教授から次のようなコメントがありました。

「学術出版に関しては、ジャーナル購読料の高騰や、オープンアクセス化に伴うコストなどの



京都大学 学術研究支援室 人社系グループ

問題にどこの大学も苦しんでいる。ドイツの Projekt DEAL などは注視しているが、日本で実現可能な解決策が見つからないなか、今日の発表は潜在的な可能性を提示してくれたように思う。研究者としても、出版に際しプレプリントを活用しつつあるが、欧州でのオープンサイエンスに向けた一連の動きの一部であることがわかり、心強く思う。」

この企画は、KURA の人文社会科学系研究支援プログラム担当、稲石奈津子 URA、神谷俊郎 URA、天野絵里子 URA、佐々木結 URA、小泉都 URA、ヴィットフェルト・アーロン URA、鈴木環 URA が企画・運営しました。KURA では、この出版月間を契機として、今後とも研究成果を海外へ発信する研究者を支えていきます。

関連リンク

KURA 海外書籍出版支援ポータル： <https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/support/495>